

「仕事だ」といえば何事も通るといふ発想に凝り固まった。九〇年代の長期不況によって、リストラや企業整理があつたとはいえ、この国の社会では、なお終身雇用概念は健在であり、人々の心理と行動をとらえ続けている。

しかし、団塊の世代が六〇歳を過ぎると、状況は一変する。

団塊の世代は新しく元氣だ。当然そのほとんどは働き続ける。もちろん、給与は下がる。年功賃金で嵩上げされていた部分が消え、今日ただ今の働きに応じた市場価格になるからだ。これをマクロ経済的に見れば、市場価格によって雇用できる「自由なる労働力」の出現といえる。二〇一〇年代には、この自由で安価な六〇代労働力を上手に利用した企業こそ勝ち組になるだろう。これによって日本経済のローコスト化が進み、新たな発展の道が開かれることだろう。

一方、団塊の世代の側から見ても、可能性は大きい。給与は下がっても、年金などと併せれば、自由処分が可能な所得はそれほど下がらない。定年後の就労は、年金兼業型であり、その分、若い世代との競争でも優位に立つことになる。

すでに例がある。かつてタクシীর運転手は若者の職業だったが、今では圧倒的に高齢者が多い。労働の価格競争で、年金兼業型の高齢者が若者を圧倒したのだ。

開業医も高齢化が著しい。お客（患者）の高齢化によって、高齢医の方が親しみと信頼を得やすくなったからだという。市場の高齢化は、高齢者の働き口をも広げる。働き口がなくて困るのは、むしろ技能のない若年者の方だろう。

本当に好きなことにだけ打ち込もう

今、国も自治体も財政の見直しを迫られている。六〇代を迎える団塊の世代も家計と人生を見直すべきだ。

定年退職をすれば、職縁社会からは離れる。再就職しても、終身雇用の職場のような濃密な人間関係は生まれない。だがそれを嘆く必要はない。

むしろ職縁ゆえの支出を削り、本当に自分の好きな分野に支出を集中することができる。

職縁は職場を去ると共に終わる。昔の仲間や職場の後輩に見栄を張るのは無駄なことだ。かつての職場や職歴を披露するのは愚かなことだ。六〇代を迎えれば、社内の目や職場の将来を気にすることもなく、本当に好きなことに打ち込もう。それが高齢者向きの市場を創り、多くの高齢者に職場を与えることにもなる。

高齢者の需要に高齢者が供給する。それによって日本の経済が拡大すれば、この国は世界最初の未来型好老文化の国として、二一世紀の人類をリードすることができる。団塊の世代の「黄金の一〇年」が始まるうとしているのだ。